

態十二令月

花鏡泉

青空文庫

いちぐわつ
一月

山嶺の雪なほ深けれども、其の白妙に紅の日や、美しきかな玉の春。松籟時として波に吟ずるのみ、撞いて驚かす鐘もなし。萬歳の鼓遙かに、鞀唄は近く梅ヶ香と相聞こえ、突羽根の袂は松に友染を飜す。をかし、此のあたりに住ふなる橙の長者、吉例よろ昆布の狩衣に、小殿原の太刀を佩反らし、七草の里に若菜摘むとて、讓葉に乗つたるが、郎等勝栗を呼んで曰く、あれに袖形の浦の渚に、紫の女性
は誰そ。……蜺御前にて候。

にぐわつ
二月

西日に乾く井戸端の目簾に、殘しの寒さよ。鐘いまだ氷る夜の、北の辻の鍋焼餛飩、幽に池の石に響きて、南の枝に月凄し。一つ半鉦の遠あかり、其も夢に消えて、曉の霜に置きかさぬる灰色の雲、新しき障子を壓す。ひとり南天の實に色鳥の音信を、

窓^{まじ}晴^はるゝよ、と見^みれば、ちら／＼と薄^{うす}雪^{ゆき}、淡^{あは}雪^{ゆき}。降^ふるも積^{つも}るも風^ふ情^{ぜい}かな、未^み開^{かい}紅^{こう}の
梅^{うめ}の姿^{すがた}。其^その苔^{つばみ}の雪^{ゆき}を拂^ははむと、置^{おき}炬^こ燧^{たつ}より素^す足^{あし}にして、化^け粧^{はひ}たる柴^{しば}垣^{がき}に、庭^{には}下^げ駄^たの棲^{つま}
を捌^{さば}く。

さんぐわつ
三 月

いたいけなる幼^{をさな}兒^ごに、優^{やさ}しき姉^{あね}の言^いひけるは、緋^ひの氈^{せん}の奥^{おく}深^{ふか}く、雪^{ぼん}洞^{ぼり}の影^{かげ}幽^{ゆう}なれば、
雛^{ひな}の瞬^{また}き給^{たま}ふとよ。いかで見^みむとて寝^ねもやらず、美^{うつく}しき懷^{ふところ}より、かしくも密^そと見^み參^{まゐ}らす
れば、其^その^{うへ}に尚^なほ女^め夫^{をと}雛^{ひな}の微^ほ笑^ゑみ給^{たま}へる。それも夢^{ゆめ}か、胡^こ蝶^{てふ}の翼^{つばさ}を權^かにして、桃^もと花^は菜^な
の乗^{のり}合^あ船^{ふね}。うつゝに漕^こげば、うつゝに聞^きこえて、柳^{やなぎ}の土^ど手^てに、とんと當^{あた}るや鼓^{つづみ}の調^{しらべ}、鼓^た
草^{んぽ}の、鼓^{つづみ}の調^{しらべ}。

しぐわつ
四 月

春^{はる}の粧^{よそほ}の濃^こき淡^{うす}き、朝^{あさ}夕^{ゆふ}の霞^{かすみ}の色^{いろ}は、消^きゆるにあらず、晴^はるゝにあらず、桃^もの露^{つゆ}、花^{はな}

の香に、且つ解け且つ結びて、水にも地にも靡くにこそ、或は海棠の雨となり、或は松
 の朧となる。山吹の背戸、柳の軒、白鵝遊び、鸚鵡唄ふや、瀬を行く筏は燕の如く、燕
 は筏にも似たるかな。銀鞍の少年、玉駕の佳姫、ともに恍惚として陽の闌なる
 とき、陽炎の帳靜なる裡に、木蓮の花一つ一つ皆乳房の如き戀を含む。

五月

藤の花の紫は、眞晝の色香朧にして、白日、夢に見ゆる麗人の面影あり。憧憬れ
 つゝも仰ぐものに、其の君の通ふらむ、高樓を渡す廻廊は、燃立つ躑躅の空に架り
 て、宛然虹の酔へるが如し。海も緑の酒なるかな。且つ見る後苑の牡丹花、赫耀
 として然も靜なるに、唯一つ繞り飛ぶ蜂の羽音よ、一杵二杵ブンくと、小さき黄金の
 鐘が鳴る。疑ふらくは、これ、龍宮の正に午の時か。

六月

照り曇り雨もものかは。辻々の祭の太鼓、わつしよいくの諸勢、山車は宛然
 薬玉の纏を振る。棧敷の欄干連るや、咲掛る凌霄の紅は、瀧夜叉姫の襦袢を欺
 き、紫陽花の浅葱は光圀の襟に擬ふ。人の往來も躍るが如し。酒はさざんざ松の風。緑
 いよく濃かにして、夏木立深き處、山幽に里靜に、然も今を盛の女、白百合の花、其
 の膚の蜜を洗へば、清水に髪の丈長く、眞珠の流雲して、小鮎の簪、宵月の影を走る。

しちぐわつ
七月

灼熱の天、塵紅し、巷に印度更紗の影を敷く。赫耀たる草や木や、孔雀の尾を
 宇宙に翳し、羅に尚ほ玉蟲の光を鏤むれば、松葉牡丹に青蜥蜴の潜むも、刺繡の帶
 にして、驕れる貴女の装を見る。盛なる哉、炎暑の色。蜘蛛の圍の幻は、却て鄙下る
 蚊帳を凌ぎ、青簾の裡なる黒猫も、兒女が掌中のものならず、髻に蚊柱を號
 令して、夕立の雲を呼ばむとす。さもあらばあれ、夕顔の薄化粧、笥の水に玉を
 含むで、露臺の星に、雪の面を映す、姿また爰にあり、姿また爰にあり。

はちぐわつ
八月

ひまはり 日向葵、ひまはり 日向葵、ひやくじつこう 百日紅の昨日も今日も、暑さは蟻の數を算へて、麻野、萱原、
あをすゝき 青薄、刈萱の芽に秋の近きにも、草いきれ尚ほ曇るまで、立敵ふ早雲恐しく、
いちりづか 一里塚に鬼はあらずや、並木の小笠如何ならむ。否、炎天、情あり。常夏、花咲け
り。優しさよ、松蔭の清水、柳の井、音に雫に聲ありて、旅人に露を分てば、細瀧
の心太、忽ち酢に浮かれて、鰻鮓、蒟蒻を嘲ける時、冷奴豆腐の夢はじめて涼し
く、爪紅なる蟹の群、納涼の水を打つて出づ。やがてさら々と渡る山風や、月の
影に瓜が踊る。踊子は何々ぞ。南瓜、冬瓜、青瓢、白瓜、浅瓜、眞桑
瓜。

くぐわつ
九月

のこんあつ 残の暑さ幾日ぞ、又幾日ぞ。然も刈萱の蓑いっしかに露繁く、芭蕉に灌ぐ夜半の
雨、やがて晴れて雲白く、芙蓉に晝の蜚鳴く時、散るとしもあらず柳の葉、斜に簾を驚か

せば、夏なつ瘦やうせに尚なほ美うつくしきが、轉うた寢ねの夢ゆめより覺さめて、裳もすを曳ひく濡ぬれ縁えんに、瑠璃るりの空そらか、
 二に三さん輪りん、朝あさ顔がほのちひさ小ちひさく淡あはく、其その色いろ白しろき人ひとの脇わき明あけを覗のぞきて、帶おびに新しん涼りやうの藍あゐを描えがく。
 ゆるき扱しごき帶みも身みに入しむや、遠とほき山やま、近ちかき水みづ。待まち人びと來きたれ、初はつ雁かりの渡わたるなり。

じふぐわつ
十月

雲くも往ゆき雲くも來きたり、やがて水みづの如ごとく晴はれぬ。白しろ雲くもの行ゆく衛へに紛まがふ、蘆あし間まに船ふねあり。粟あは、蕎麥そば
 の色しき紙しば、畠たけ、小田をだ、棚田たなだ、案山子かゝしも遠とほく夕ゆふ越こえて、宵よひぐら暗くらきに舷ふなばた白しろし。白しろ銀がねの柄えもて汲くめ
 りてふ、月つきの光ひかりを湛たふるかと思みれば、冷つめき露つゆの流ながるゝ也なり。凝こつては薄うすき霜しもとならむ。見みよ、
 朝あさ風なきの浦うらの渚なぎさ、潔いさぎよき素絹そけんを敷しきて、山やま姫ひめの來きたり描えがくを待まちつ處ところ——枝えだすきたる柳やなぎの中なかよ
 り、松まつの蔦つたの梢こずゑより、染そめ出いだす秀しう嶽がくの第一だいいつぱう峯ほう。其その山やま風おろし里さとに來きたれば、色いろ鳥どり群むれ
 て瀧たきを渡わたる。うつくしきかな、羽は、翼つばさ、霧きりを拂はらつて錦葉もみぢに似にたり。

じふいちぐわつ
十一月

青碧澄明の天、雲端に古城あり、天守聳立てり。濠の水、菱黒く、石垣
 に薦、紅を流す。木の葉落ち落ちて森寂に、風留むで肅殺の氣の充つる處、枝は朱
 槍を横へ、薄は白劍を伏せ、徑は漆弓を潛め、霜は鏃を研ぐ。峻峰皆將軍、
 磊嚴盡く貔貅たり。然りとは雖も、雁金の可懷を射ず、牡鹿の可哀を刺さず。
 兜は愛憐を籠め、鎧は情懷を抱く。明星と、太白星と、すなはち其の意氣を照
 らす時、何事ぞ、徒に銃聲あり。拙き哉、驕奢の獵、一鳥高く逸して、哂笑ふこ
 と三度。

じふにぐわつ
十二月

大根の時雨、干菜の風、鳶も鳥も忙しき空を、行く雲のまゝに見つゝ行けば、霜林
 一寺を抱きて峯靜に立てるあり。鐘あれども撞かず、經あれども僧なく、柴あれども人を
 見ず、師走の市へ走りけむ。聲あるはひとり筧にして、巖を刻み、石を削りて、冷き枝の
 影に光る。誰がための白き珊瑚ぞ。あの山越えて、谷越えて、春の來る階なるべし。され
 ば水筋の緩むあたり、水仙の葉寒く、花暖に薰りしか。刈あとの粟畑に山鳥の

姿^{すがた}あらはに、引^{ひき}棄^すてし豆^{まめ}の殻^{から}さらくと鳴^なるを見^みれば、
 一^{いち}抹^{まつ}の紅^{こう}塵^{ちん}、手^て鞠^{まり}に似^にて、輕^{かろ}

く巷^{ちまた}の上^{うへ}に飛^とべり。
 大正九年一月—十二月

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二十七」岩波書店

1942（昭和17）年10月20日第1刷発行

1988（昭和63）年11月2日第3刷発行

※題名の下にあった年代の注を、最後に移しました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：米田進

2002年4月24日作成

2003年5月18日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

月令十二態

泉鏡花

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>